朝日西遺跡出土の紀年銘資料及び共伴遺物

服　部　哲　也*

1　はじめに

朝日西遺跡59年度調査のA・B区は、清洲城下町のうち外堀と中堀の間に位置し、特に寺社地が推定される地区にあたる。

遺跡及び調査区の子細は、本報告等に譲るとして、ここでは、「文禄」「慶長」の紀年銘資料と多数の遺物が出土したことで注目されるSD13について紹介しておく。

2　SD13の概要(第1図)

南→北方向（N－15°－E）から西→東方向（E－6°－S）へほぼ直角に折れ曲がる素掘りの溝であり、寺院を画する堀と推定される。

調査区全体を、近現代の耕作土と攪乱によってかなり削平されており、現状での規模は幅4.5m～5.5m、深さ0.3m～0.5mである。しかし、僅かに遺存状態の良かった調査区東端で、幅、深さとも増すことを確認しており、想定復原幅6m～7m、深さ1m～1.2m（北へ向かって徐々に深くなる。南、北での溝底の標高差は約0.3mを測る。）の規模を考えることができる。

遺構内の埋土は、基本的に上層の茶褐（灰）色粘質土、下層の灰褐色粘土の2層であるが、下層粘土は南へいくに従い薄くなり、やがて僅かな砂層の堆積と変化する。従って、溝北辺では水の淀んだ状態を、西辺では微量な水の流れを推定することができよう。

また、上層粘質土は、中世無釉陶器（所謂山茶椀）等、明らかに溝の年代より古い土器片を多量に包含していた。このことは、慶長15年（1610）に始まった「清洲越し」に伴い寺院が移築された後、残った堀を前代の遺物を包含する周辺の土を用いて、一気に埋め立てた結果と考えられる(1)。

3　紀年銘資料

(1)「文禄貳年」（1593）銘、施釉陶器（灰釉系椀）第2図の25

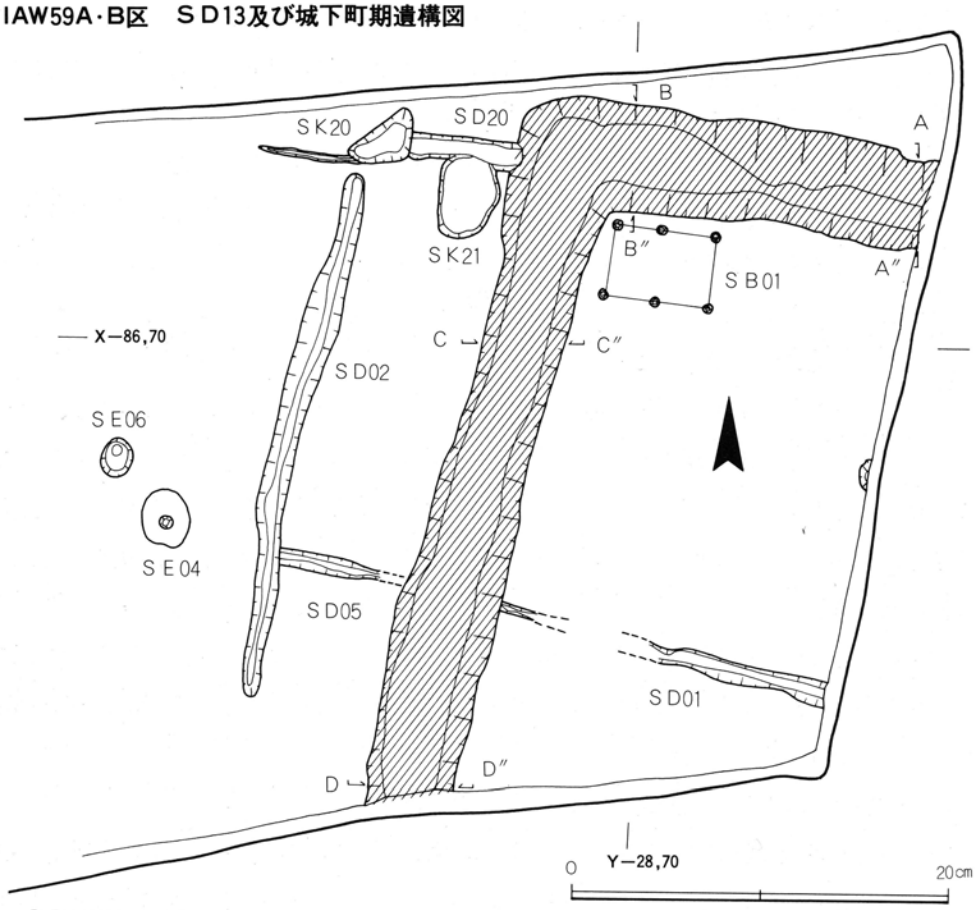
遺構の南端にて、上層粘質土と下層砂との境から出土した。

器形上半を欠損するが、現存高3.2cm、底径5.9cmを測る。高台はヘラケズリの後、丁寧にヨコナデされており、貼り付けによるか、ケズリ出しかは不明である。

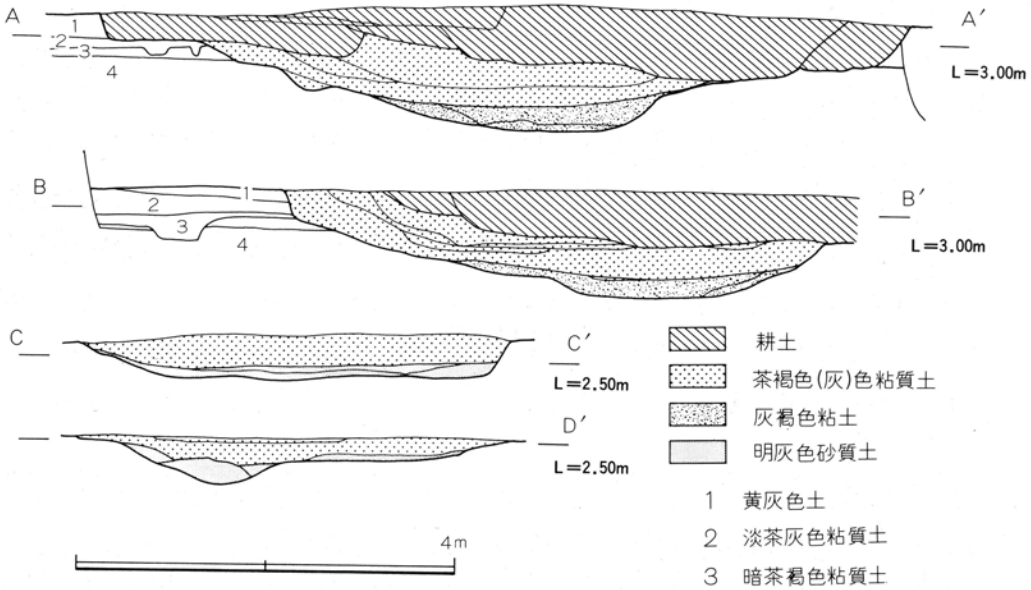
墨書は、底部中央に「楽師」高台脇の露胎部分に「文禄貳年□〔月カ〕□〔十カ〕二日　願主七七玉　敬□〔白カ〕」と鮮かな達筆で書かれている。

＊名古屋市教育委員会学芸員

IAW59A・B区　ＳＤ13及び城下町期遺構図



ＳＤ13断面図



第１図

「願主」「敬（白）」の文言から、何らかの供養に用いられたと考えられるが、同様な例が他にも出土しており(2)、「土器に供養の文言を書いて寺に奉納する」という当時の信仰形態のひとつを知ることができよう(3)。

次に、「文禄二年」の年号とその記せられた陶器との関係を考えてみたい。

器形は、腰の丸い筒形の茶椀になると思われる。その特徴として、①器形にゆがみは見られない、②高台は正円で丁寧に調整されている、③内面底には「茶だまり」と呼ばれる窪みがない。などを挙げることができ、筒形茶椀（大窯Ⅲ期より出現すると考えられている(4)。）のうちでは古いタイプに属すると考えられる(5)。

また、釉は鉄分を多く含んだ灰釉（釉際では、僅かに鉄釉の発色が認められるが、鉄釉の上に灰釉を施す二度掛けのものではない）であり、にぶい黄褐色を呈している(6)。従来から用いてきた灰釉、鉄釉に工夫をこらして、新たな釉を作りだそうとした努力は、大窯Ⅲ期以降栄んにみられるところであるが、（その結果として所謂瀬戸黒、黄瀬戸がある）今回出土の資料も、こうした試行錯誤の時期の釉として捉えることができよう。

以上のことから、施釉陶器そのものの年代を推定すれば、大窯Ⅲ～Ⅳ期に位置づけることが最も妥当と思われ、「文禄二年」の年号と記せられた陶器の焼造時期とは、若干の隔たりがあると考える。

(2)「慶長三、四年」（1598、1599）銘卒塔婆（第３図）

頭部を五輪塔状に整形した板塔婆である。溝が方向を変えるコーナー部分の、下層灰褐色粘土から19本出土した。紀年銘はNo10「慶長三年」No17、No19「慶長四年」の他、接合不明ながら「慶長」と読み取れる断簡が２片ある(7)。

溝からの出土ということで、「流し塔婆」の風習が思い起こされるが、19本は重なり合った状態であり、意図的に流されたものとは考え難い。おそらく、寺で不用になった塔婆を一括して廃棄したのであろう。

重ねられた塔婆を、上から順に見ていくと、大きさ書式がまちまちのNo１～No12（慶長三年銘卒塔婆を含む）、大きさ書式とも統一されているNo13～No19（慶長四年銘卒塔婆）の２グループに大別される。しかも、前者の12本は、墨書部分が盛り上がったものや、墨書が消えて墨痕のみを僅かに留めているものなど、後者の７本に比べ明らかに損傷が著しい。これは、塔婆が外気に触れていた期間の差と理解でき、１年の年号違いを端的に表わしている。

No13～No19の７本は、日付が７日ごとに変わっていることから、所謂「七本塔婆」と考えられる(8)。七本塔婆の供養方法は、現在各地方によって若干異なるが、一七日に７本全部に書いて仏前に供え、七七日の読経を終えてから墓前に建立するのを基本としている。

今回出土の７本も、全く同じ規格の塔婆（五輪塔状の切り込み位置すら違えない）を用いていることや、一定の書式で、しかも同一人物の筆によると考えられることなどから、７本すべて同一の日に書かれたものであり、その供養方法が現在と変わらなかったことを示唆する。

次に、塔婆に書かれる文言と書式であるが現在では宗派によって細かく規定されており塔婆から宗派を限定することは比較的容易である。しかし、今回出土の塔婆については、現在用いられているいずれの宗派の書式とも一致しない。僅かに、No10、No12の文言が「甘露門」という禅宗の経文からの一文であることや、No11の漢詩が禅書に禅語録として納められていることから、禅宗の可能性を推定するにとどまる。

こうした、現在用いられている書式に一致しない事実を、「書式が確立される以前の時期であった」と考えるか、「書式が一時曖昧になった時期(9)」と捉えるか、または「単に記した個人の問題(10)」として片付けるか、今のところは即断を避けておきたい。

いずれにしても、今回出土の卒塔婆は、紀年銘を有すということに限らず、近世直前の仏教文化を窺う上で貴重な資料といえよう。

4　出土遺物

ＳＤ13から出土した遺物は、総数3,734点(11)の多量の土器類の他、木製品では前述の卒塔婆、「南無阿弥陀仏」の名号を記した木簡、槍形の形代、漆塗りの椀等、石製品では五輪塔、宝篋印塔の各部分が出土している。寺院の堀という遺構の性格上、遺物全体にも仏教的な色彩が強く認められる。

ここでは、紀年銘資料との関係で最も注目される土器について述べておきたい。

総破片数3.734点のうち、測図が可能なものは108点であり、内訳は土師器56点、陶磁器52点であった。以下主要な器種について概略しておく。

土師器・瓦質土器（第２図1 ～12）

（皿）法量から径８cm（４）、径11cm（１～３）に分類できる。いずれもロクロ成形であり、底部には糸切痕をとどめる。また、両者とも灯明皿に使用されたものを含む。

（小皿）ＳＤ13から最も多く出土した土器がこの径５cm～６cmの扁平な小皿である(12)。日常用いる器とは考え難く、上記の皿とは区別した。すべて手づくねによるもの（５・６）手づくね成形の後、ヘラ状工具で内面を調整するもの（内面にハケメをとどめる）（７・８）ロクロ成形によるもの（底部に糸切痕を残す）（９・10）に分類できる。

その他の土師器として焼塩壺の蓋（11）がある(13)。また、通常土師器の主構成をなす鍋・釜類は細片のものに限られている。

（瓦質土器）印花文を施した香炉が一点あり、畿内からの搬入品と考えられる。

陶器（第２図13～50）

（椀）瀬戸、美濃製品（鉄釉14～23・長石釉13）の他、唐津が１点出土している。

法量から径12cm前後のものと、径８cm以下の小椀とに分けられる。

そのうち主となるのは、前者の所謂天目茶椀である。23は化粧掛けが行なわれており、16世紀前半に比定される。19は器高7.2cmを測り、他と比べ大ぶりとなる点で新しい様相を呈す。

24唐津は、灰釉系の釉（灰色に発色）を掛けた無文の椀であり、露胎部分は赤褐色を呈す。口縁は内湾ぎみに立ち上がり、高台はケズリ出しによる。岸岳系の飯洞甕窯、山瀬窯の製品に酷似し、大橋氏の編年[14]によるⅠ期（16世紀末～17世紀前）に相当する。

（皿）瀬戸、美濃製品に限られる。口径から８cm未満（灰釉26）、10cm内外（灰釉27、鉄釉28・29）、12cm内外（長石釉30～36）に分けられる。そのうち、灰釉鉄釉製品と法量を違えることに大きな特徴がある長石釉の皿は注目される。

無文31～33、鉄絵30、所謂菊皿34～36の三タイプに分類でき、更に無文の皿は、口縁が外反するもの32・33、しないもの31、（一点出土の鉄絵皿の口縁は外反しない）、菊皿は花弁状の文様を内面だけに施すもの34・35と、外面にも施すもの36（口縁はともに外反しない）に細分できよう。また各タイプの法量は、器高2.2cm～2.7cm、口径11.4cm～12.4cmの間におさまるまとまりがみられるが、外反しない無文皿のみ器高３cm、口径12.8cmと異にする[15]。

（甕）常滑の無釉陶器が出土している。（50）赤羽氏の編年試案[16]によればⅢ期のCに位置づけられ、16世紀後半の年代が考えられている。

（その他の土器）瀬戸・美濃製品に限られる。

（壺）鉄釉42～46、（鉢）鉄釉擂鉢37、長石釉38～41、（羽釜）鉄釉48、（香炉）灰釉47　16世紀前半代の製品、（蓋）鉄釉29、等がある。

尚、瀬戸・美濃製品は、そのほとんどが井上編年[17]Ⅴ期に比定されるものであり、16世紀後半～17世紀初頭の年代が与えられる。

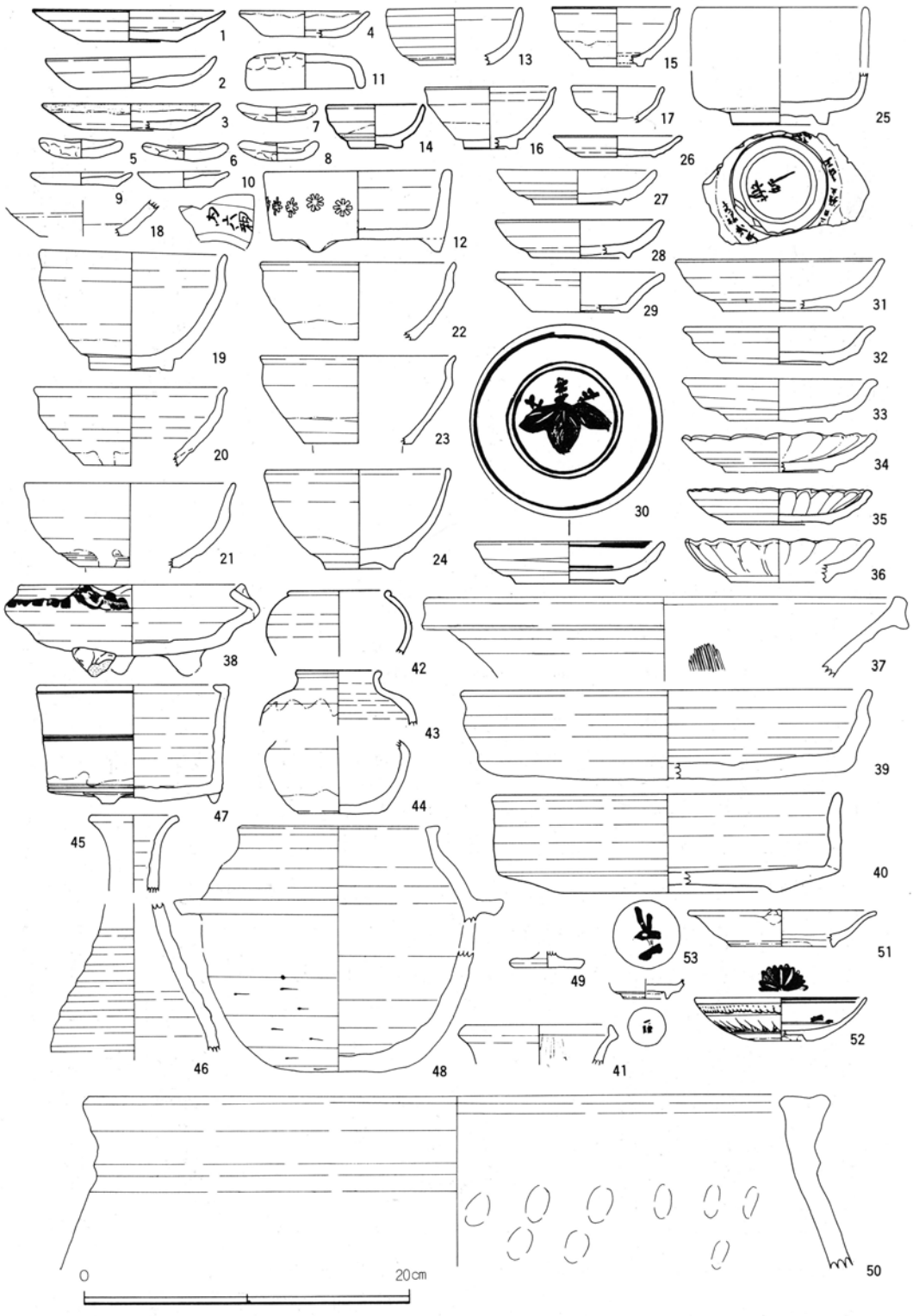
輸入磁器（第２図51～53）

白磁皿51、染付皿52、染付小椀53がある。そのうち51・52は、小野氏の編年[18]によるC群にあたり、15世紀末～16世紀中葉の年代が比定される。

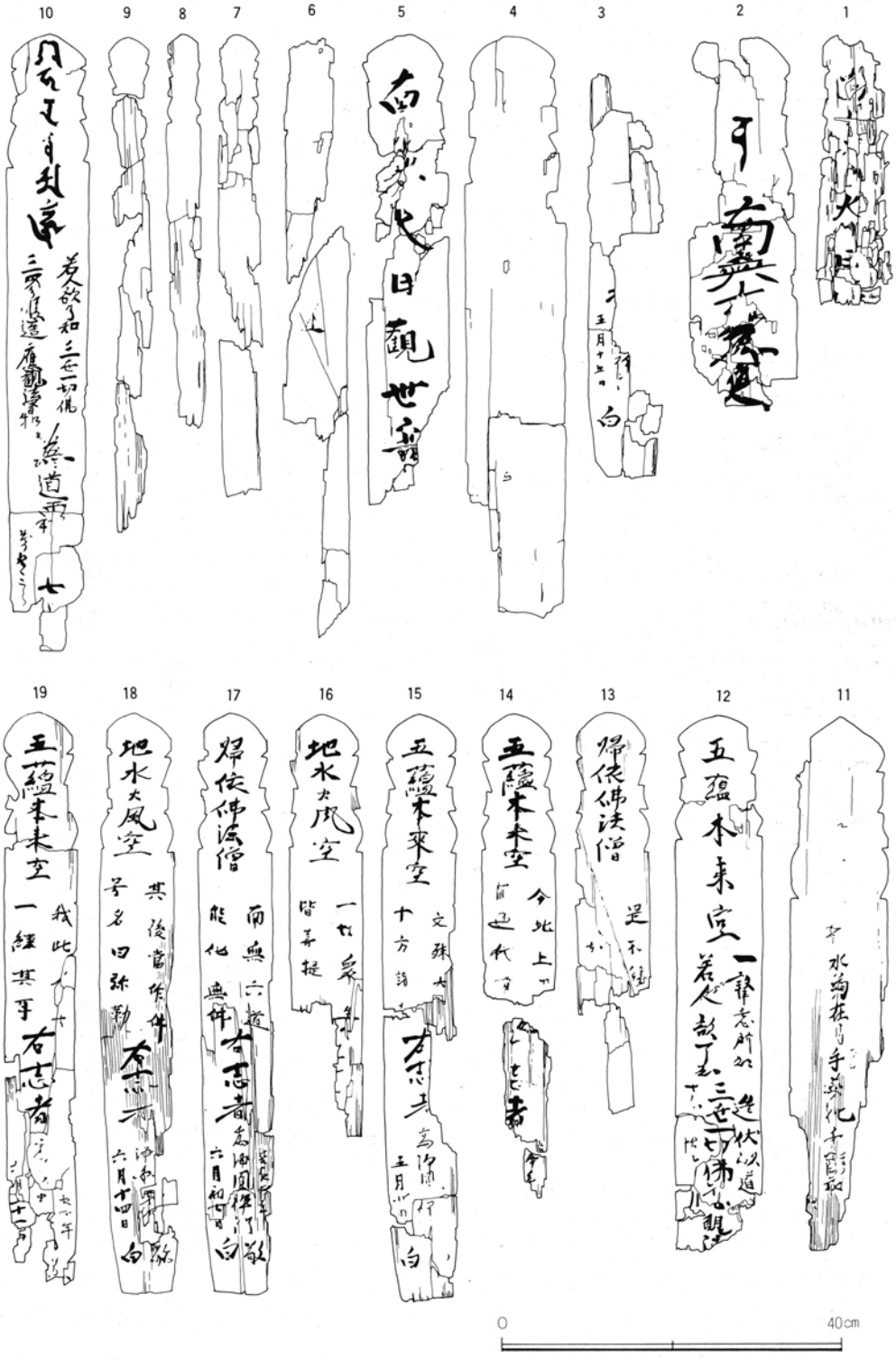
5　おわりに

土器編年における紀年銘資料の重要性は、あらためて述べるまでもないが、前項では紀年銘資料をあえて無視し、従来の年代観のみによって出土遺物の年代を考えてみた。

本稿を終えるにあたって、これら従来の編年観に、今回出土の紀年銘資料がどう関わっ



第２図　ＳＤ13出土土器



第３図　ＳＤ13出土卒塔婆

ていくのかを整理し、（特に瀬戸・美濃製品について）まとめにかえておきたい。

まず、ＳＤ13出土の瀬戸・美濃製品が大窯Ⅴ期を中心に構成されていることは前述した。そこで大窯Ⅴ期の年代観を井上編年に従い、今一度整理しまとめておく。

上限は「長石釉の出現」とし、その年代を大坂城・根来寺・堺市環濠都市等、消費地での長石釉製品のあり方から、大正十一年（1583）～天正十三年（1585）に設定されている。また下限は、「連房式登窯の出現（織部の出現）まで」とし、織部の紀年銘資料などから慶長十年（1605）以前とされている[19]。

すなわち、大窯Ⅴ期の年代は、天正十二年前後から慶長十年までの約20年間であり、文禄二年、慶長三、四の紀年銘資料は、この年代幅中にいずれも納まることとなる。以上のことから、今回出土の紀年銘資料とその共伴遺物は、全体としては従来の編年観を裏づけるものと言えよう。

さらに、今回の資料が、従来の編年に大きく関わる点は、大窯から連房式登窯への転換期についてである。

編年では、「慶長十年以前」という年代が示されているものの、消費地での良好な例が無い為、判然としない現状にある。従って、慶長四年銘資料に、連房式登窯の製品が伴なうかどうかは最も注目されよう。（遺構の廃絶時期はあくまでも「清洲越し」以降と考える。その意味において、年代枠を慶長十五年にまで下げることが可能である。）

しかし、連房式登窯製品の有無については以下の問題点により、不明と言わざるを得ない結果となった。

一番問題となったのは、大窯・連房式登窯の編年がその名の通り窯の区分であり、土器の編年でないことである。

井上編年では「登窯Ⅰ期は、大窯時代の釉ないし器形そのものを引き継いでおり、この時代に新たに登場するような釉薬、手法、技法は少ない」と述べておられ、その編年基準を、焼き締まりの違いや、所謂緋色の有無などの、焼き上がりの僅かな差に求められている[20]。同一の手法、技法、釉薬を用いた同じ器形の土器が、上・下に編年されていることは本来の「土器編年」から大きく矛盾していると言わざるをえず、今後、編年上での大区分に用いられている「大窯期」「登窯期」の名称をも含め再検討が望まれよう。

二番めの問題として、所謂「織部」が挙げられる。

前述の如く、他の器種からは大窯と登窯との判別を明瞭にしえない為、現在では大窯から出土の例がない「織部」をもって登窯Ⅰ期の基準とされている。しかし、「織部」という特殊な陶器の有無により、遺構、遺物の年代を決定することは（特に消費地遺跡においては）極めて危険と思われる。さらに、登窯Ⅰ期初頭の他器種が、大窯期と変わらぬ器形

であったことを考え合せば、登窯開始の時期と「織部」の焼造開始の時期との間に、若干の時期差を推定することができる。従って、「織部が無い」＝「登窯以前の時期」とは一概に言いきれないと考える(21)。

本稿は、ＳＤ13出土の紀年銘資料と、その共伴遺物を紹介することにあった。

合せて、若干の課題・問題点をも記したが、触れえなかった問題は多岐に渡っている。(特に遺物相互の横へのつながりに関しては全く不十分であった。)今後、考察を進めるにあたり、さらに整理検討する必要があろう。

末筆ながら、ＳＤ13の出土遺物を整理する過程においては、諸先生方より数々の御教示御協力を得た。記して謝意を表します。

赤羽一郎、伊藤嘉章、井上喜久男、江崎武、加藤優、楢崎彰一、鷲阪宗演　　(敬称略)

〔注〕

(1) 事実、当溝の掘り方を構成する黄灰色土、淡茶灰色粘質土は、13世紀～14世紀の遺物を多く包含しており、色調、質ともに溝上層の埋土と酷似する。
(2) 第２図の18施釉陶器椀（鉄釉天目茶椀）がそれである。高台脇の化粧掛け部分に「為六親□」の供養文句が書かれている。
(3) 尚「楽師」については、幸若舞等の能楽関係を推定している。金原宏「「楽師」黄瀬戸椀」（『埋蔵文化財愛知』No１、1985）
(4) 瀬戸、美濃大窯の年代観については、井上喜久男氏の編年による。井上喜久男「16世紀の瀬戸・美濃窯」（『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会1985）他
(5) 器形は、多児見市小名田町尼ヶ根１号窯出土の筒茶椀（瀬戸黒）に最もよく類似する。通常瀬戸黒の釉が掛けられるべき器形に、鉄分の多い灰釉が掛けられた感じを強く受ける。
(6) 所謂「黄瀬戸」の範疇に考えることもできよう。「文禄二年の黄瀬戸」となれば可児市大萱の窯下窯から出土した「文禄二年銘入り黄瀬戸」が思いおこされる。しかし、窯下窯出土の黄瀬戸は「油揚手」と呼ばれる最盛期の黄瀬戸であり、本資料の釉とは明らかに異なる。
(7) 紀年銘を有す卒塔婆の出土例としては、
○福井県一乗谷遺跡　永禄元年（1558）　天文18年（1549）
○広島県草戸千軒町遺跡　永禄４年（1561）　明応２年（1493）
○岡山県助三畑遺跡　応永30年（1423）
○兵庫県鵤、城山遺跡　文明６年（1474）
があり、すべて室町時代以後であることは注目される。
(8) 注７の４遺跡から出土の卒塔婆にも、七本塔婆と考えられるものを含むが、七本とも出土した例はない。
(9) 助三畑遺跡から出土の卒塔婆は七本塔婆と考えられるが、書かれている文言、書式は現在の真言宗で用いる書式と全く一致している。
(10) 本遺跡出土の卒塔婆には、誤字、当て字、連文の入れ換え等が多く見られる。
(11) 埋土の説明で述べた如く、上層からは前時代の遺物が多量に出土している。ここでは、これらの遺物は除外した。
(12) この種の小皿は、清洲城下町遺跡や、堺市環濠都市遺跡などからも多く出土している。溝から出土する例がほとんどであり、川、堀、溝に関する信仰が推測される。
(13) 渡辺誠氏の分類によればＡ類にあたり、最も古いタイプに属す。渡辺誠「焼塩」（『日本技術の社会史』第二巻日本評論社　1985）
(14) 大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」（『国内出土の肥前陶磁』丸州陶磁文化館　1984）
(15) 同時期の窯である土岐市高根山窯沢１号窯での法量結果とよく一致し、特に外反しない無文皿の法量については、他と異なることが報告されている。（『高根山古窯跡群』土岐市教育委員会　1984）
(16) 赤羽一郎「戦国期の常滑窯製品の推移（試案）」（『近世城館跡出土の陶磁をめぐって』座談会資料　愛知県陶磁資料館1984）
(17) 注４文献
(18) 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」（『貿易陶磁研究』No２日本貿易陶磁研究会　1982）
(19) 大窯が17世紀前半まで存続したことは、土岐市隠居山西窯、高根山窯沢窯などの古窯址の調査からも明らかとされている。
(20) 注４文献
(21) 今回の調査を含め、清洲城下町での織部の出土は皆無に等しい。
又、今回出土の資料の中で、連房式登窯製品の可能性をもつものとして、第２図19が挙げれよう。